

## 修士論文

# Tunneling 抑止のためのシンボルに基づく 分散ハッシュテーブルを利用した DNS に関する研究

高須賀 昌烈

2020 年 3 月 15 日

奈良先端科学技術大学院大学  
先端科学技術研究科

本論文は奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科に  
修士(工学) 授与の要件として提出した修士論文である。

高須賀 昌烈

審査委員：

門林 雄基 教授      (主指導教員)

笠原 正治 教授      (副指導教員)

林 優一 教授      (副指導教員)

妙中 雄三 准教授      (副指導教員)

# Tunneling 抑止のためのシンボルに基づく 分散ハッシュテーブルを利用した DNS に関する研究\*

高須賀 昌烈

## 内容梗概

### キーワード

ドメインネームシステム, 分散ハッシュテーブル, P2P ネットワーク, DNS Tunneling, ネットワークセキュリティ

---

\*奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 修士論文, 2020 年 3 月 15 日.

# **A Study of Symbol based Domain Name System using Distributed Hash Table for Tunneling Deterrence\***

Shoretsu Takasuka

## **Abstract**

### **Keywords:**

Domain Name System(DNS), Distributed Hash Table(DHT), P2P Network, DNS Tunneling, ネットワークセキュリティ

---

\*Master's Thesis, Graduate School of Information Science, Nara Institute of Science and Technology, March 15, 2020.

# 目次

<b>1. 序論</b>	<b>1</b>
1.1 背景	1
1.2 目的	2
1.3 本論構成	2
<b>2. DNS Tunneling</b>	<b>3</b>
2.1 DNS プロトコル	3
2.1.1 概要	3
2.1.2 構造	5
2.2 データ流出方法：DNS Exfiltration	7
2.3 データ流入方法：DNS Infiltration	9
<b>3. 関連研究</b>	<b>11</b>
3.1 特徴量に基づく検知手法	11
3.1.1 DNS Tunneling における特徴量	11
3.1.2 閾値推定	11
3.1.3 機械学習に基づくモデル	11
3.2 ポスト名前解決システム	12
3.2.1 P2P ネットワークを利用した名前解決システム	12
3.2.2 Blockchain を利用した名前解決システム	12
3.3 課題	12
<b>4. 提案システム</b>	<b>13</b>
4.1 Tunneling 抑止指向型名前解決システム：SORES	13
4.2 デザイン	15
4.2.1 P2P を組み合わせたハイブリッドなアーキテクチャ	15
4.2.2 識別子と名前空間	16
4.2.3 ソートされたハッシュ空間の範囲に基づいたゾーン	18
4.2.4 認証基盤に基づく信頼されるレコード情報	20

4.2.5	リソースレコードタイプの選別による DNS Infiltration 対策	21
4.2.6	コンテンツのデータフォーマット	22
4.3	動作メカニズム	23
4.3.1	レコード情報に対する操作	23
4.3.2	名前解決	23
<b>5.</b>	<b>評価</b>	<b>24</b>
5.1	実装	24
5.2	実験環境	24
5.3	DNS Tunneling	24
5.3.1	DNS Exfiltration	24
5.3.2	DNS Infiltration	24
5.4	要素ごとの特性	24
5.4.1	RTT(Round Trip Time)	25
5.4.2	パケットサイズ	25
5.4.3	トラフィック量	26
<b>6.</b>	<b>議論</b>	<b>27</b>
6.1	クエリにおけるハッシュ値計算の最適ノード	27
6.2	今後の課題	27
<b>7.</b>	<b>結論</b>	<b>28</b>
	謝辞	29
	参考文献	30
	付録	33
<b>A.</b>	<b>発表リスト (国内研究会)</b>	<b>33</b>

## 図 目 次

1	DNS による名前解決 . . . . .	5
2	ドメインの名前空間 . . . . .	6
3	arbitrary-string という任意の文字列が, DNS クエリのラベル部を用いて, 事前に用意した権威サーバ (exfil.com) に転送される様子	9
4	TXT レコードに登録された情報について, DNS クエリで問い合わせることで権威サーバから命令情報を取得している様子 . . . . .	10
5	SORES の全体図 . . . . .	14
6	マネージャとプロバイダの関係図 . . . . .	15
7	レコード情報に対する認証プロセス . . . . .	20
8	コンテンツファイルのデータフォーマット . . . . .	22

## 表 目 次

1	主要リソースレコード一覧 . . . . .	7
2	SORES における用語 . . . . .	17
3	6つのマネージャによって管理されるハッシュテーブルにおいて, マネージャの情報とそのマネージャが管理するゾーンが記載された対応表の例 . . . . .	19
4	DNS Infiltration として利用することができるリソースレコード一覧	22
5	DNS と SORES の特性比較 . . . . .	25

# 1. 序論

## 1.1 背景

ドメインネームシステム (Domain Name System, DNS) は、ドメイン名に関連づけられた IP アドレスなどのリソースレコードの情報を解決する機能を担っており、現在のインターネットの利活用において、この仕組みは極めて重要な技術の一つである。1987 年に RFC1034, RFC1035 [1, 2] として公開された DNS のコンセプトは、現在もなお本質的な仕組みは変更されることなく適用されている。他方で、性善説的な当時の設計にはセキュリティやプライバシーが考慮されておらず、DNS には様々な課題が残っており、また設計の脆弱性を悪用した攻撃手法も多数報告されている。その設計に起因する課題の内、DNS クエリのラベルおよびリソースレコード (Resource Record, RR) をデータ転送のメディアとする DNS Tunneling がある。

DNS Tunneling は、一般にフィルタリングされることが少ない DNS の特徴と DNS がデータ転送のメディアとして機能しているとは想像しない人の認知の隙間をついた手法であり、ファイヤー・ウォールや IDS/IPS といったセキュリティラインを突破するために使用される。このように本来の目的とは違う方法でデータを転送する手法は、一般に秘匿通信 (Covert Channel) と呼ばれる [5]。DNS Tunneling は、秘匿通信の代表例であり、マルウェアと C2(Command & Control) サーバとの通信の秘匿手法、または、ターゲットから取得したデータを外部に流出させるといった目的実行の手段として、実際のインシデントで広く利用されている [7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14]。DNS Tunneling による DNS クエリは、以下(??)に示すように、転送量に比例して長いラベルを持ち、ラベルとしての文字列制約を満たすためのエンコーディングによって高いエントロピーを示す特徴がある。

また、インタラクティブなシェルなど双方向の通信を DNS Tunneling で実現しようとする場合、時間あたりに高頻度なトラフィックが発生するという特徴が現れる。このような特徴に基づき、パターンマッチングや機械学習、文字列分布などのメソッドを用いた検知手法が過去に多数考案されてきた [15, 16, 17, 18, 19, 20]。それら検知手法は、高い精度で分類を実現しているものがあるが、DNS Tunneling



として検知する対象としているパケットには一般に利用することができる DNS Tunneling ツールキット [21, 22, 23] が使用され、それらは特に過剰な特徴量を示し、明らかに正規の DNS クエリと異なる特徴がある。高い精度を示す従来の検知手法だが、しかし、それらを迂回する手法として、1 回あたりの転送データ量を少なくすることで特徴量を減らす Low Throughput なバイパス手法、また、パケット間のインターバルを数日・数ヶ月と長期化させることでファイル肥大から一定期間しか保存されることがないログ管理の隙間を突いた Slow な Tunneling 手法があり、従来の検知手法では対応することが困難である。悪意を持つユーザの視点として、1bit でも転送できることは秘匿通信として利用することができるため、転送量の少なさは軽視されるべきではない。

他方で、DNS は初めに述べたように、現在のインターネットの根幹技術として根ざしており、抜本的な改変は期待されない。すなわち、既存の DNS による名前解決のメカニズムに大幅な改変を加えないという制約下で、Tunneling に対処することが現実的な最適解であると考えられる。

## 1.2 目的

本研究では、既存の DNS の名前解決メカニズムの大部分を流用することが一部の改変に留めながら、DNS を用いたデータ転送としての機能の排除を実現する次世代の名前解決メカニズムを提案する。

## 1.3 本論構成

本稿の構成は次の通りである。第 2 章では、準備として、本論において核となる技術内容・特徴およびそのメカニズムについて説明する。第 3 章では、関連研究としてトラフィックおよびペイロード特徴に基づいた検知手法を説明し、そのバイパス手法として Low Throughput 手法・Slow Tunneling 手法があることを示す。第 4 章では、提案手法を説明する。第 5 章では、提案手法の DNS Tunneling に対する評価を行い、併せて提案手法の特定についても説明する。第 6 章では、提案手法の課題について議論する。最後に、第 7 章にて結論を述べる。

## 2. DNS Tunneling

本章では，DNS Tunneling による脅威モデルについて説明する．

### 2.1 DNS プロトコル

本節では，DNS(Domain Name System) について説明する．

#### 2.1.1 概要

本節では，DNS(Domain Name System) の概要について説明する．

DNS は，インターネットに接続された無数のコンピュータを一意に識別するための IP アドレスを，人が認識しやすいドメイン名に変換するシステムである．元来，インターネット上でのホストの識別には IP アドレスが使用される．しかし，32bit の名前空間をもつ 10 進数表記の IPv4(E.g. “192.168.0.1”) は，決して人にとって認識しやすいものではない．そこで，自然言語に近いアルファベットや数字で表記されるホスト名と IP アドレスを関連づける仕組みが登場した．当初，hosts.txt と呼ばれる対応表は，中央集権的に管理されていたがホスト数の増大に伴い，管理が困難になっていった課題があった．その解決策として登場したのが，管理するドメインをゾーンで切り出し権限を委譲していく分散的な階層構造を持つ DNS である．

DNS のシステムアーキテクチャは，クライアント・サーバ構成で成り立っている．一般に，クライアントがドメインを問い合わせた場合，サーバはドメインに対応づけている IP アドレスを応答することで，クライアントはドメインに対応づけられた IP アドレスを解決することができる．DNS のサービスは，機能に応じて 3 つに分けられる．

- スタブリゾルバ
- フルサービスリゾルバ
- 権威サーバ

スタブリゾルバは、名前解決の問い合わせを依頼するクライアントノードである。フルサービスリゾルバ(キャッシュサーバ・リカーシブサーバとも呼称される)は、スタブリゾルバからの名前解決問い合わせをハンドリングするノードである。過去に問い合わせられた情報をキャッシュとして保持する機能と、レコード情報を保持・提供する権威サーバに対する再帰問い合わせを行う機能を担う。一般に、フルサービスリゾルバは、“root.hints”というルート権威サーバとそのアドレスが対応づけられたファイルを保持しており、再帰問い合わせの際にはこのファイルに基づき、最初の宛先となる権威サーバのアドレスを解決する。権威サーバは、レコード情報を保持するサーバノードであり、フルリゾルバからの転送される問い合わせ依頼に応答する。

クライアントから“www.example.com”のIPv4アドレスについて問い合わせられた場合を考える。はじめに、クライアントであるスタブリゾルバは、スタブリゾルバと同一セグメント内のフルサービスリゾルバもしくは、ネットワークセグメントに依らずインターネット上のどのクライアントからもアクセスできるパブリックなフルサービスリゾルバ(オープンリゾルバ、パブリックリゾルバとも呼称される)に問い合わせる。フルサービスリゾルバははじめに、ドメイン名が“www.example.com”で、リソースレコードが“A”の応答レコードがキャッシュにあるかどうかを判別する。キャッシュにヒットした場合にはキャッシュの情報をクライアントに応答され、ヒットしなかった場合には、root.hints ファイルを参照しルート権威サーバにリクエストパケットを転送する。クエリ(問い合わせ)を受け取ったルート権威サーバは、ルートゾーン内の“com”ドメインが委譲された権威サーバのアドレスを応答する。次に、フルサービスリゾルバは、“com”ドメインが委譲された権威サーバに対し同様のクエリを転送する。“com”ドメインを管理する権威サーバは、同様にして、“com”ゾーン内の“example.com”が委譲された権威サーバのアドレスを応答する。フルリゾルバは、“example.com”ドメインを委譲された権威サーバ宛に同様のクエリを転送する。“example.com”ゾーンを管理する権威サーバは、保持するゾーンファイルからクエリされたドメインのリソースレコードについて探索し、探索の結果としてレコード情報をフルサービスリゾルバに応答する。フルサービスリゾルバは、権威サーバからの応答された

レコード情報の TTL(Time To Live) の期間レコード情報をキャッシュしたのち、クライアントのスタブリゾルバに結果を応答する。このようにして、再帰的な問い合わせの仕組みに基づき名前解決が行われる。

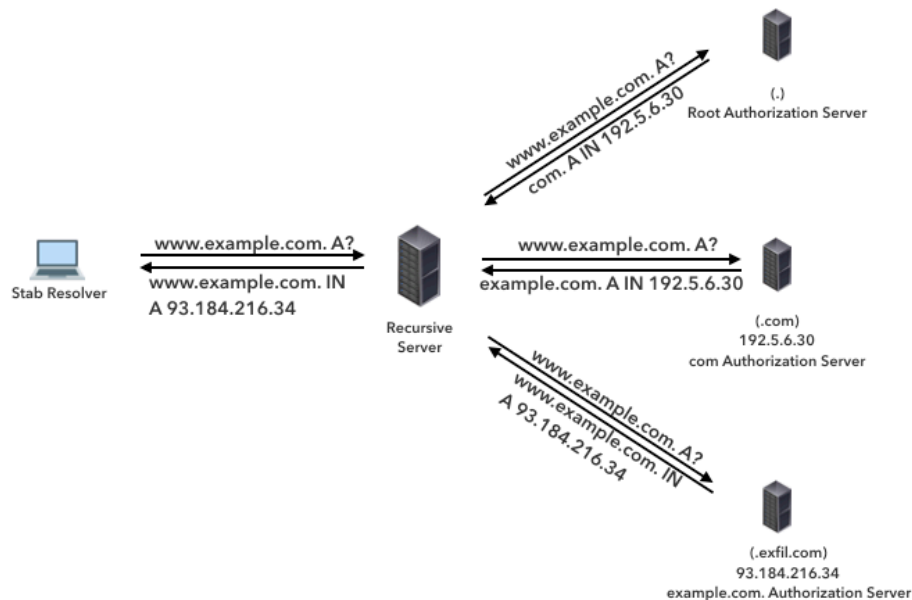


図 1 DNS による名前解決

### 2.1.2 構造

本項では、DNS における構造について説明する。

DNS は、階層ごとに名前空間を分割させた識別子の分散管理システムである。このシステムは、ルートを頂点として、その下層に独自の名前空間を保持するドメインをツリー状に連結されていく構造をとる。各ドメインは、権威サーバによってドメインの名前空間が管理される。ドメインの名前空間はゾーンと呼ばれ、そのドメインに位置づく権威サーバによって管理される。DNS には委譲の仕組みがあり、権威サーバは自身が管理するゾーンについてドメインが枝分かれしている場合、下層の権威サーバにゾーンを管理を譲ることができる。一般にルートの直下で構成されるドメインを TLD(Top Level Domain) と言い、“com.”や“net.”などがある。さらにその下層には、SLD(Second Level Domain)

が続き、TLD から  $n$  番目 ( $n \mid n \in \mathbb{N}$ ) のラベルが第  $n$  レベルドメインと序列していく具合である。TLD を大別すると、“.com”や“.net”をはじめとした特定分野別の gTLD(global Top Level Domain)、“.jp”や“.ch”のような国ごとに割り当てられている ccTLD(Country Code Top Level Domain) の二つに分けられる。

ドメイン名は、ドット区切りでラベルを連結形式で表記され、一般にルートを意味する最も右のドットは省略される。ドメイン名は、ルートと区切り文字を除いて最大が 253bit である。ラベルは、各ドメインを表し、数字とアルファベットおよびハイフン (“-”) の文字列から表記される最大長 63bit で定義される。

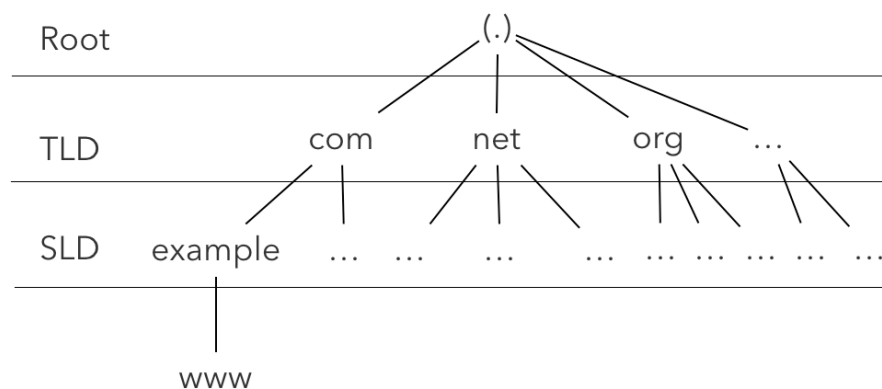


図 2 ドメインの名前空間

ドメイン名に関連づけられる情報は、リソースレコード (Resource Record, RR) と呼ばれる。リソースレコードは、タイプが定義されており、目的ごとに使用されるタイプが異なる。最も一般的なレコード、A レコードタイプは、ドメインに対して IPv4 アドレスを関連づけるために使用される。名前解決において、クライアントはドメイン名とそのドメインに関連づけられたリソースレコードを指定する。これによって、クライアントは、ドメインに関連づけられたリソースレコード情報を取得することができる。表 5 は、主要なリソースレコードである。

DNS Tunneling は、DNS をデータ転送のメディアとした秘匿通信手法の総称である。第 2.1 節で示す通り、DNS は、ドメイン名とそのドメイン名に関連づけられたリソースレコードのレコード情報を解決するシステムであり、現代のイン

タイプ	値	意味
A	1	ホストの IPv4 アドレス
NS	2	権威サーバ
MF	4	メール転送サーバ
CNAME	5	別名
SOA	6	権威ゾーンの開始
NULL	10	NULL(実験用)
PTR	12	ドメイン名のポインター (逆引き)
HINFO	13	ホスト情報
MINFO	14	メールボックスおよびメールリスト情報
MX	15	メール交換
TXT	16	任意文字列

表 1 主要リソースレコード一覧

ターネットにおいて極めて重要な役割を担うネットワークプロトコルである。このため、DNS はトラフィックがフィルタリング・モニタリングされにくいプロトコルの一つでもある。しかし、DNS のデザインは、クライアントサーバアーキテクチャに基づき、クライアントのスタブリゾルバと権威サーバが直接やり取りされるため、の問い合わせ情報が権威サーバに転送されるため、転送される仕組みは、データ転送の仕組みでもある。過去のインシデントでは、権威サーバをデータ回収のサーバとして利用するケースや、次 2.3 項の流入通信とを組み合わせ、命令サーバとの相互通信の流出方向の通信手段として利用されてきた。

## 2.2 データ流出方法 : DNS Exfiltration

DNS Exfiltration は、再帰問い合わせの仕組みによって、DNS クエリがコンテンツを保持する権威サーバに転送される仕組みを利用した手法。これによって、クライアントから権威サーバを宛先とする方向に対して任意のデータを転送することができる。データを転送するためのキャリアは、DNS クエリの Question Section

の QNAME 内のラベルである。第 ?? 節で示すように、ドメイン名には一つのラベルあたり 63bit、全体で 253bit という制約がある。すなわち、DNS Exfiltration によって転送できるデータ量の最大は 253bit である。他方で、DNS の名前解決の仕組みはインターネットの利活用において必要不可欠であるため、多くの組織において DNS のトラフィックがフィルタリングされることはほとんどない。このような性質をもつ DNS を利用することで、悪意を持つユーザがなんらかの方法で潜伏した組織内部のネットワークから情報を流出させる際の手法として、他のネットワークプロトコルに比べて都合が良い。

DNS Exfiltration において、データを転送する際の宛先ノードは特定のゾーンを管理する権威サーバである。例えば、あるローカルネットワーク内に位置づくノードからグローバルネットワーク内の “exfil.com” という権威サーバにデータを転送することを考える。一般に、転送するデータを QNAME におけるラベルに埋め込む際には、Base Encoding [4] のような変換規則によるエンコード処理が施される。この処理によって、転送データがバイナリデータである際にも転送効率上げたり、ラベルの文字列制約を満たさないデータも転送することができる。また、メッセージの意味抽出を困難にするためのトリックとして用いられる。変換された文字列は、

この権威サーバは、“exfil.com” 以下の全ての名前空間をゾーンとして管理することができる。データを転送する際のキャリアとなるのは、DNS クエリの “exfil.com” 以下のラベルである。DNS のラベルは、数字・アルファベット・先頭以外でハイフン (“-”) という文字列の制約があるため、任意の文字列をそのまま注入することは困難である。任意の文字列を文字列エンコーディングの手法で変換させ、用意できた文字列を QNAME に含め、適当なりソースレコードタイプを指定すれば、宛先となる権威サーバにデータが転送される。最後に、ラベルを同一の文字列エンコーディングアルゴリズムでデコードすることで、元のデータを受け取ることができるという具合である。このようにして、DNS の名前解決の仕組みを応用することで、任意の権威サーバに任意の文字列を転送することができる。これが DNS Exfiltration の動作メカニズムである。図 3 に、DNS Exfiltration のメカニズムを図解した様子である。

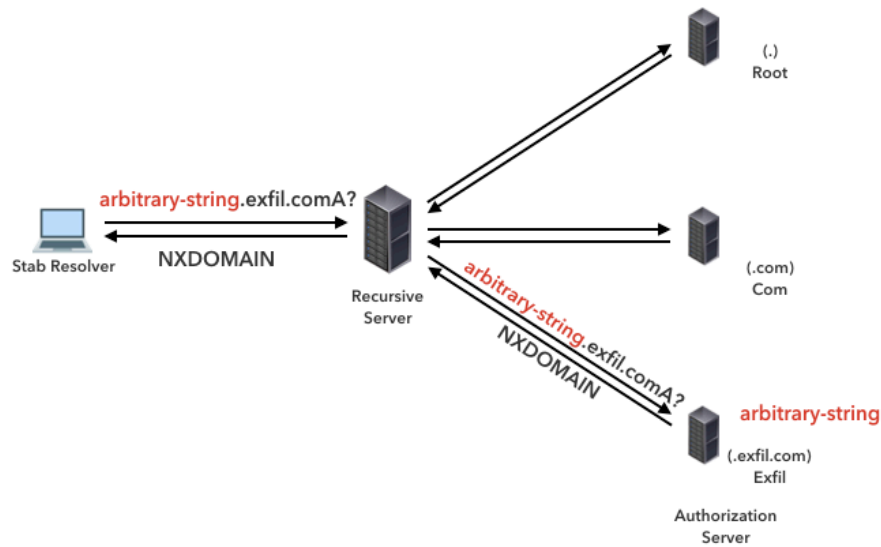


図 3 arbitrary-string という任意の文字列が，DNS クエリのラベル部を用いて，事前に用意した権威サーバ (exfil.com) に転送される様子

## 2.3 データ流入方法：DNS Infiltration

DNS Infiltration は，DNS Exfiltration と逆方向の権威サーバからクライアント方向にデータを転送する手法である．この手法は，DNS のリソースレコードに任意の文字列が含まれる設計になっていることを利用したものである．リソースレコードのタイプは多種多様であるが，ゾーンファイルを自由に編集できる現在の DNS エコシステムでは，ドメイン名との関わりに関係なく任意の情報をドメイン名に関連づけることが可能である．DNS Infiltration を実施するには，送信元となる権威サーバのドメイン名に，適当なリソースレコードのタイプ (E.g. TXT) に転送したい文字列を登録しておくことで，そのドメイン名を QNAME としてそのレコードタイプを問い合わせることで，クライアントのもとでデータを回収することができるという具合である．DNS のリソースレコードを転送キャリアとする流入通信のメカニズムを図解した様子が，図 4 である．



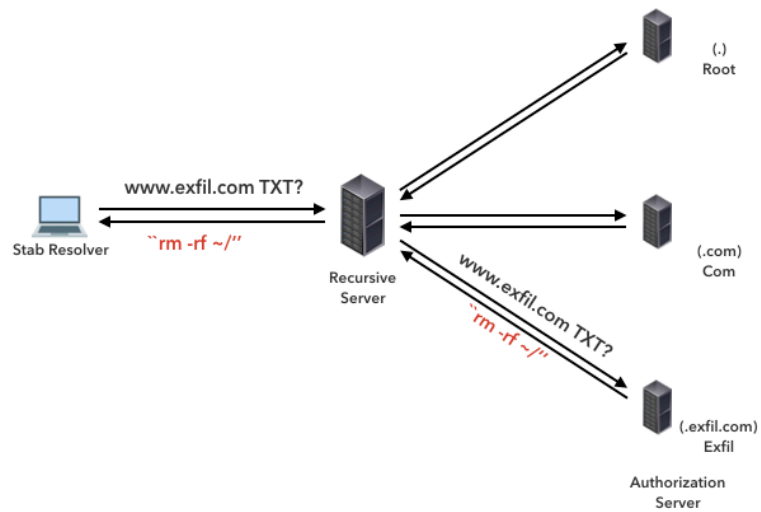


図 4 TXT レコードに登録された情報について、DNS クエリで問い合わせること  
で権威サーバから命令情報を取得している様子

## 3. 関連研究

本章では、はじめに DNS Tunneling に対する既存の対策手法の概要と課題を説明する。次に、従来とは異なるアーキテクチャを採用した名前解決システムに関する概要と提案手法との違いについて説明する。

### 3.1 特徴量に基づく検知手法

本節では、DNS Tunneling に対する対策手法について説明する。

#### 3.1.1 DNS Tunneling における特徴量

DNS Tunneling の手法を用いる場合、いくつかの特徴が現れることがある。Born ら [15] は、DNS Tunneling におけるクエリ内のドメイン名に出現する文字の出現頻度を着目することで、正規のドメイン名と DNS Exfiltration メソッドによって生成されたドメイン名とを分類のに有用であることを明らかにした (2010)。著者らは、正規のドメインであれば英語のような自然言語における文字の出現頻度と高い相関があることに加えて、エントロピーと文字列分布に高い相関があることも明らかにした。

#### 3.1.2 閾値推定

#### 3.1.3 機械学習に基づくモデル

DNS Tunneling メソッドを使用した時の DNS クエリは、第 2 項で述べるような特性が出現する。この性質に基づき、これまでに多数の検知手法が提案されてきた。

## 3.2 ポスト名前解決システム

### 3.2.1 P2P ネットワークを利用した名前解決システム

これまでに、DNS における～の課題に対して、P2P に基づいた名前解決システムは数多く提案されてきた。

### 3.2.2 Blockchain を利用した名前解決システム

## 3.3 課題

本節では、先行研究および新しいアーキテクチャに基づく名前解決システムにおける DNS Tunneling への課題を示す。(大筋) 検知に基づく手法は、誤検知が避けられない。ペイロードアナリシスに対しては、一回あたりの転送量を調整することでバイパスすることができる。分析の対象がトラフィックの場合は、頻度を長期間に延長することで、ログファイルの肥大によるストレージの過去のログファイルとの分析コストを重くなり分析の隙間をバイパスできる。既存のアーキテクチャに基づくアプローチは、既存の DNS と根本から異なるアーキテクチャを採用しており、マイグレーションが考慮されていない。また、ピュアの P2P アーキテクチャおよびブロックチェーンのアーキテクチャでは、スタブリゾルバからのクエリが権威サーバとブロックチェーンをそれぞれ介することで、依然として、DNS Tunneling として機能し、発生を抑止するメソッドではない。

## 4. 提案システム

本章では、提案システムについて説明する．はじめにシステムの概要と目的を示す．次に、システムの詳細に関して、アーキテクチャ・動作メカニズム・プロトコル・スケーラビリティを順に説明する．

### 4.1 Tunneling 抑止指向型名前解決システム：SORES

本節では、システムの概要について説明する．

SORES(Symbol Oriented Records rEsolution System) は、全てのレコード情報をシンボルとなる識別子が付与し、フラットな名前空間で管理することによって、問い合わせの際にシンボル指向でレコード情報を解決する名前解決システムである．シンボルには、224bit の名前空間をもつハッシュ関数によって算出されるメッセージダイジェストを使用する．具体的なレコード情報は、ゾーンを管理するサーバノードに階層的に連結したノードのよって作成・更新・破棄される．SORES の名前空間は、ソートされたハッシュ値の範囲に基づき分割され、既存システムの TLD によって分割された範囲をゾーンとして分割的に管理される．SORES におけるクライアントは、シンボルを算出することによって、レコード情報を保持するノードを一意に特定することができる．また、シンボルからレコード情報を保持するノードを一意に特定の名前解決プロセスでは、レコード情報を作成したエンティティは介在されない．すなわち、レコード情報を作成する機能とレコード情報を管理する機能を異なるサービスノードに分離させることによって、SORES では DNS Exfiltration が発生することを抑止する．

SORES では、DNS Infiltration に対して、認証基盤の導入と使用できるリソースレコードを制限するメソッドを採用する．認証基盤では、ドメインに関連づけるレコード情報との関連性を評価することで不審なレコード情報がハッシュテーブル上にストアされることを防止する．QNAME にシンボルとして 224bit のメッセージダイジェストを使用することによって、副次的効果として、偽装 DNS 応答パケットの作成が困難にできるという性質が期待される．また、既存システムにおける DNSSEC によって実現されてきた送信元のトレーサビリティについて、

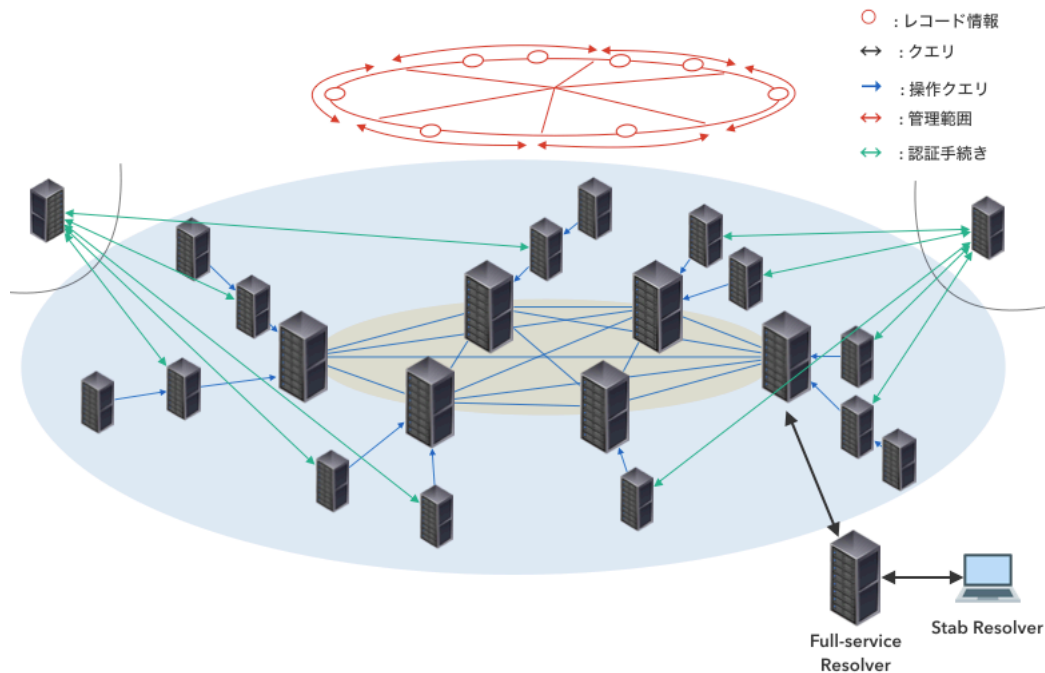


図 5 SORES の全体図

SORES では認証基盤とシンボルに基づく DNS 応答パケットの偽装困難性によって実現され、DNSSEC の必要性はなくなる。さらに、任意の文字列を注入することができるレコードタイプ “NULL” と “TXT” について、実験目的の NULL タイプの使用制限と TXT タイプは機能をシンタックスの限定している SPF に回帰させることで対処する。

SORES の特徴を以下に示す。

- シンボルに基づく名前解決システム
- フラットな名前空間
- ソートされた範囲に基づくゾーン分割
- レコード情報の操作機能と管理機能の分離
- 認証されたレコード情報

## 4.2 デザイン

### 4.2.1 P2P を組み合わせたハイブリッドなアーキテクチャ

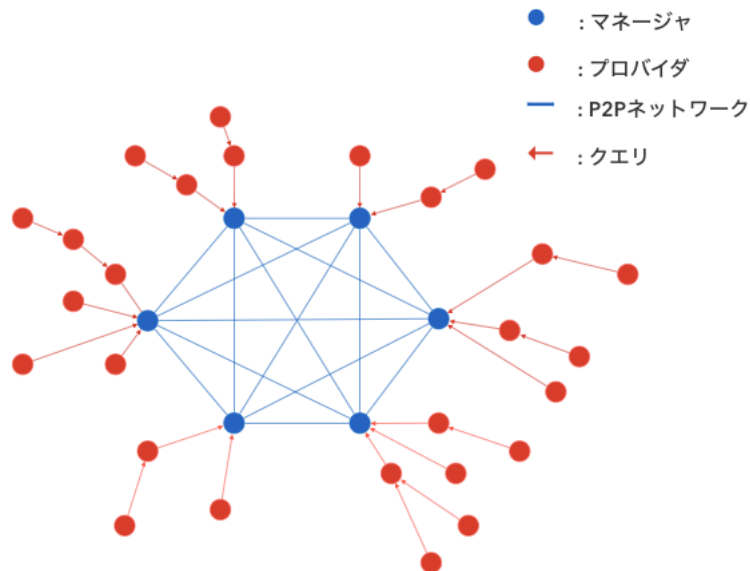


図 6 マネージャとプロバイダの関係図

全体のアーキテクチャに関して、SORESでは、既存のDNS同様にクライアントサーバアーキテクチャで構成される。サーバは、フルメッシュネットワークで相互に接続される固定ノードによるP2Pネットワークアーキテクチャで構成される。

SORESにおけるサービスノードは、機能に基づいて4つに分けることができる。スタブリゾルバは、既存のDNSと同様に動作するノードであり、DNSクライアントとして名前解決を依頼する主体として位置づくノードである。フルサービスリゾルバもスタブリゾルバ同様、1つ追加機能を除いて変更点はなく、スタブリゾルバからの問い合わせに対してリソース情報を保持する主体に代理的に問い合わせ機能と、問い合わせた情報を一定期間キャッシュするキャッシュサーバとして機能するノードである。変更された点は、以降で説明するように、SORESではレコード情報に対する識別子をキーとしてアクセスする。フルサービスリゾルバは、スタブリゾルバからの従来のフォーマットのDNSクエリについて、ドメ

イン名とレコードタイプからハッシュ値の算出を行う機能を担う。算出したハッシュ値をキーとして、フルサービスリゾルバは、サーバに転送する。SORESでは、権威サーバが機能に基づき二つサービスノードに分割される。

マネージャは、実際のレコード情報を保持し、クライアントからの問い合わせに応答するサーバノードである。また、マネージャは、既存のDNSにおけるTLDに位置づく権威サーバが担当する。続いて、4つ目のサービスノードとなるプロバイダは、レコード情報を作成・更新および消去といった操作を担当する。プロバイダは、既存のDNSにおけるSLD以降の権威サーバに相当し、ドメインの階層構造を従いマネージャに接続される。プロバイダは、マネージャを介在することで、レコード情報を操作することができる。例えば、example.comプロバイダが“www”のIPアドレス情報を作成することを考える。example.comプロバイダは、“www.example.com”とレコードタイプ“A”およびその値“93.184.216.34”を含むデータを接続先のcomマネージャにリクエストする。comマネージャは、リクエストされたドメイン名とそれに関連づけるレコードタイプから識別子を算出し、担当のマネージャにストアリクエストを転送するという具合で動作する。SORESにおける用語については、表 4.2.1 で示す。

#### 4.2.2 識別子と名前空間

本項では、レコード情報にアクセスするために用いる識別子、コンテンツIDとその名前空間について説明する。既存のDNSの名前解決システムでは、正引きをする際、ドメイン名とレコードタイプの二つの情報をキーとして、サーバは保持するゾーンファイルから該当するレコード情報が求まる。他方、SORESでは、ドメイン名とレコードタイプに基づき算出されるコンテンツIDを識別子として指定することでレコード情報にアクセスする。

におけるレコード情報へのアクセス方法は、識別子をキーとすることでデータを取得することができる。コンテンツIDと呼ぶ、この識別子は、ドメイン名とレコードタイプの順番でその文字列の和を引数とするメッセージダイジェストで表現することができる。例えば、ドメイン名を“www.example.com”，レコードタイプを“A”とした場合、引数となるのは“www.example.comA”という具合である。

表記	意味もしくは機能
コンテンツ	・ 識別子に関連づけられたレコード情報の実体
コンテンツ ID	・ 識別子
レコード情報	・ リソースレコードの具体的な値 (E.g. IP アドレス)
リソースレコードタイプ	・ オブジェクトに関連づけるリソースレコードの型 (E.g. A, AAAA, MX)
オブジェクト	・ 問い合わせる対象 (E.g. ドメイン名もしくは IP アドレス)
スタブリゾルバ	・ 名前解決クライアント
フルサービスリゾルバ	・ スタブリゾルバからのクエリハンドリング ・ 識別子の作成
マネージャ	・ フルサービスリゾルバからのクエリハンドリング ・ ゾーンの管理 ・ コンテンツの保持
プロバイダ	・ コンテンツの作成・更新・削除操作

表 2 SORES における用語

続いて、SORES が採用するハッシュアルゴリズムについて説明する。SORES では、全てのコンテンツ ID がフラットな名前空間上にマップされる。従来では、異なるリソースレコードタイプのレコード情報について一つのゾーンファイルに記述することで、管理することができた。他方で、SORES では、ドメイン名とリソースレコードタイプの組をハッシュ値の引数とするため、コンテンツ ID は、レコード情報の数に比例して増加する特性がある。また、識別子の引数の一つにドメイン名が含まれていることから、識別子から元のメッセージが導き出くことが困難な性質を備えていなくてはならない。この性質を満たすことで、なんらかの方法で識別子を悪意の第三者が取得した際に DNS Exfiltration として機能してしまうことを抑止することができる。最後に、SORES では、既存の DNS のプロト



コルフォーマットを流用する設計になっているため、識別子が格納される DNS の Question Section の QNAME のサイズ制約を満たさなくてはならない。QNAME は、最大 253byte とする任意長の領域である。以上のことを踏まえて、本システムにおけるハッシュアルゴリズムの要件は、以下の通りである。

1. 名前空間は不足を無視できる程度に大きくなくてはならない
2. アルゴリズムは一方方向性の性質を備えなくてはならない
3. 最大 253byte の出力長を満たさなくてはならない

ここで、既存のハッシュ関数の特性をまとめた table を示す。

上記の内容から、SORES では、224bit の名前空間をもつ sha3 のアルゴリズムを採用する。

続いて、分離連鎖法と 2 重ハッシュ法によるコリジョン対策方法について説明する。SORES では、コンテンツのストアリングフェーズで ID にコリジョンが発生した場合、分離連鎖法に基づきストアされるハッシュテーブルに連結リストという形式でコンテンツがストアされる。リスト構造で延長するコンテンツの識別には、ドメイン ID を識別子として利用する。ドメイン ID は、コンテンツ ID と同様のハッシュアルゴリズムを用いて算出されるメッセージダイジェストの先頭 32bit で表現される、ドメイン名を引数として生成される識別子である。例えば、ドメイン名を “www.example.com” とする場合、そのメッセージダイジェストが “86ff20100c058b857bae9785bf0267e6c6afb740c18b8e9a87258485” であるとする と、“86ff” がドメイン ID となる具合である。このように算出されたドメイン ID は、DNS の Question Section のうち、それぞれ 16bit 分の領域を持つタイプとクラスの領域に埋め込まれる。上記の仕組みによって、コリジョンが発生した際には、ドメイン ID をキーとしてコンテンツを識別する。

#### 4.2.3 ソートされたハッシュ空間の範囲に基づいたゾーン

本項では、ゾーンの分割方法およびマネージャノードのアドレスとそのゾーンの範囲に関する対応表について説明する。はじめに比較のために、従来のシステムの場合について説明する。従来のシステムでは、ドメインの階層構造に従い、

ドメインの管理ノードを下位のドメイン管理ノードに委譲することでゾーンが分割される。この仕組みでは、ゾーン内の全てのレコード情報はゾーンファイルに画一的にまとめられ、そのゾーンを管理する権威サーバがレコード情報の保持機能とクライアントから応答するという二つの機能を担う。このゾーン分割メソッドでは、レコード情報の帰属が明確であり、ドメインの管理ノードがトラストアンカーとしての役割を同時に担うことができるメリットがある。一方の SORES では、識別子を算出する際に使用するハッシュ関数によって構成される名前空間に基づき、ソートされたハッシュの名前空間の連続した範囲で分割する。この分割された連続した範囲に基づきゾーンがマネージャに割り当てられることで、既存システム同様にレコード情報全体を分散的に管理する。

上記で説明するように、マネージャが管理するゾーンは、ハッシュの名前空間の連続した一部の範囲である。従って、レコード情報は、ハッシュの名前空間上で識別子をソートした際に、帰属する範囲を管理するマネージャによって保持される。マネージャのアドレスを解決する方法には、ゾーンとしてハッシュ値の範囲とそのマネージャおよびマネージャのアドレスに関する対応表 3 によって解決される。SORES では、全てのサービスノードがこの対応表を保持できることを想定しており、ノードは識別子に基づきどのマネージャがコンテンツを保持しているのかを一意に特定する。

ゾーン	マネージャアドレス	ドメイン
(00...00, 4z...zz)	192.35.51.30	com.
(50...00, az...zz)	192.5.6.30	net.
(b0...00, gz...zz)	199.249.112.1	org.
(h0...00, mz...zz)	213.248.216.1	uk.
(n0...00, sz...zz)	199.254.31.1	info.
(t0...00, zz...zz)	194.0.0.53	de.

表 3 6つのマネージャによって管理されるハッシュテーブルにおいて、マネージャの情報とそのマネージャが管理するゾーンが記載された対応表の例

#### 4.2.4 認証基盤に基づく信頼されるレコード情報

本項では，レコード情報の信頼性担保のための認証基盤について説明する．

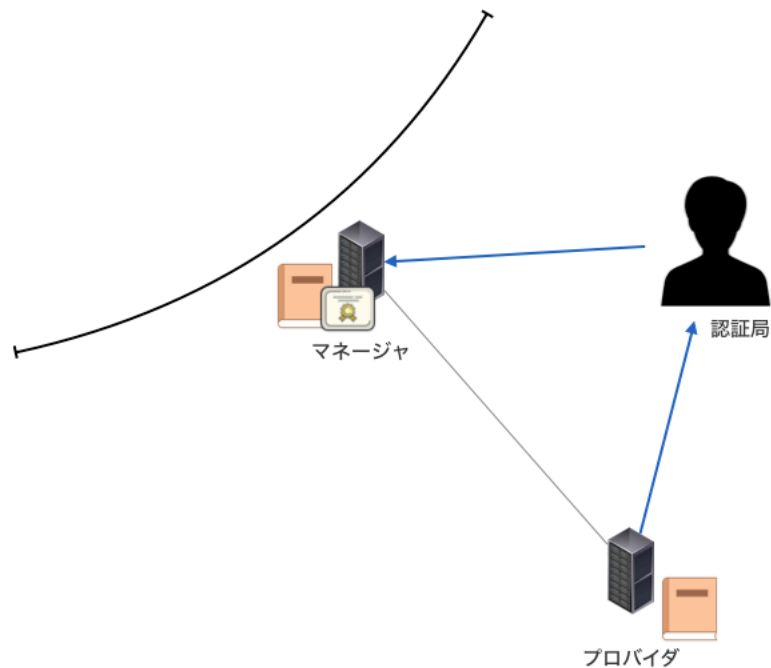


図 7 レコード情報に対する認証プロセス

SORES では，全てのコンテンツについて，信頼される第三者からストアしても良いと認可されていることを前提としている．すなわち，ハッシュテーブル上のコンテンツへの操作，またはコンテンツをハッシュテーブル上にストアするなどの操作処理をする際，プロバイダは，信頼される第三者からのレコード情報に操作することを認可してもらう必要がある．認可の証明書を発行する認証局は，プロバイダの基本情報とレコード情報に基づき証明書の発行を決定する．いま，ドメイン名 “www.example.com” のリソースレコードタイプ A として “93.184.216.34” というレコード情報を関連づけるとする．プロバイダは，認証局に対して証明書発行リクエストを転送する．認証局は，リクエストされたレコード情報について IP アドレスの到達性と不審な文字列が含まれていないこと，利用目的について評価を施す．認可された場合には，その証にデジタル証明書を発行し，マネージャにストアリクエストを転送する．マネージャは，デジタル証明書に付与さ

れた署名に基づきコンテンツの完全性を評価し、認証された場合コンテンツ ID を計算し、担当マネージャにストアリクエストを転送する。上記の手続きを経たコンテンツがハッシュテーブル上にストアされる。

#### 4.2.5 リソースレコードタイプの選別による DNS Infiltration 対策

本項では、SORES で使用するリソースレコードのタイプについて説明する。

はじめに、SORES における DNSSEC の位置づけについて述べる。DNSSEC [3] は、権威サーバからの応答パケットの偽装を検知することを目的として、データの作成元の確認とデータの完全性および、不在情報応答情報の証明する DNS の拡張仕様である。これは、主として DNS の応答パケットを偽装できる程度のパラメータであることに起因する。他方で、SORES では、応答パケットに 224bit のメッセージダイジェストが含まれるため、悪意のある応答パケットをフルサービスリゾルバに意図的にキャッシュすることは極めて困難である。以上の理由から、SORES では DNSSEC の目的にそぐわないため、リソースレコードとして使用されない。

次に、DNSSEC 以外のリソースレコードについて説明する。第 2.3 項で示すように、既存の名前解決システムでドメインに関連づけることができるリソースレコードのいくつかのタイプは、DNS Infiltration として機能することができる。DNS Infiltration を抑止するリソースレコードであることの必要条件は、ドメインに関連のない任意の文字列がレコード情報に含められないことである。既存の DNS のリソースレコードのタイプのうち、任意の文字列を含めることができるのタイプは以下の通りである。

上記の DNS Infiltration として機能する可能性のあるリソースレコードのタイプのうち、IP アドレスを偽装して情報を転送するものについては、第 4.2.4 項で述べた認証基盤によってレコード情報の正当性評価でスクリーニングすることができる。他方で、任意の文字列を注入できるのが、“NULL”・“TXT”・“CNAME”である。

NULL について考える。NULL タイプの目的は、実験用と定義されている [2]。TXT について考える。CNAME について考える。ホスト名に対する別名で関連

タイプ	意味	Infiltration の手法
A	ホストの IPv4 アドレス	
NS	権威サーバ	
MF	メール転送サーバ	
CNAME	別名	
SOA	権威ゾーンの開始	
NULL	NULL(実験用)	
PTR	ドメイン名のポインター (逆引き)	
MX	メール交換	
TXT	任意文字列	
DNSKEY		

表 4 DNS Infiltration として利用することができるリソースレコード一覧

づけることができる CNAME は、一つのサーバにおいてサービスごとにサーバの名前を変更させるために使用される。

#### 4.2.6 コンテンツのデータフォーマット

本項では、マネージャにて管理されるコンテンツのフォーマットについて説明する。

```
{
  "ContentID" : "xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx",
  "Value" : ["DomainID", "QNAME", "RType", "TTL", "Record Infomation", "Certificate Signature"]
},
{
  "contentID" : "47d87f616f550758706e1633f4de3bf28f049814eb0a52da6b554cb6",
  "message" : ["86ff", "www.example.com", "A", 3800, "93.184.216.34", '']
},
}
```

図 8 コンテンツファイルのデータフォーマット

## 4.3 動作メカニズム

### 4.3.1 レコード情報に対する操作

本項では，SORES において使用されるリソースレコードのタイプと

### 4.3.2 名前解決

## 5. 評価

本章では，提案システムの DNS Tunneling に対する機能性について評価した結果を示す．また，ネットワークに対する影響を測るために，3つの特性 (RTT・パケットサイズ・トラフィック量) について既存システムと比較した結果を述べる．評価にあたり，提案システムを実装した．はじめに，システム実装で採用したアルゴリズムに本章では，提案システムの DNS Tunneling に対する機能性評価とネットワークへの影響度について各要素ごとに関する特性評価を示す．

### 5.1 実装

本節では，提案システムの機能性および特性評価を目的として実装した

### 5.2 実験環境

### 5.3 DNS Tunneling

#### 5.3.1 DNS Exfiltration

本項では，提案システムの DNS Exfiltration への機能性について評価した結果を述べる．評価には，実装したシステムを

#### 5.3.2 DNS Infiltration

### 5.4 要素ごとの特性

本節では，SORES の特性について既存の DNS と比較に基づき評価する．

SORES では，スタブリゾルバからの名前解決クエリのうち，そのヘッダー情報に基づき識別子を算出することで，この識別子に関連づけられたレコード情報を操作する仕組みに基づき名前解決機能が動作する．DNS では，ゾーンをドメインごとに分割し，フルサービスリゾルバはルート権威サーバから目的の権威サーバに向かって再帰的に問い合わせ，権威サーバのアドレスを解決しながら，最終

的にコンテンツを保持する権威サーバからコンテンツを取得する。以上のことから、SORES では、以下のような特性を持つことがわかる。

	DNS	SORES
RTT	全ての権威サーバとの RTT の総和	マネージャとの RTT
Data Size/packet	ドメイン長依存	固定長 224bit
トランザクション回数	ラベル数依存	1
トラフィック量	線形増加	線形増加
リクエスト速度	N/A	ハッシュ計算分遅延

表 5 DNS と SORES の特性比較

から識別子に基づき、コンテンツを保持するサーバに名前解決リクエストを投げる。SORES は、フルサービスリゾルバにてスタブリゾルバから問い合わせられた名前解決命令に基づきレコード情報の識別子を算出する。この識別子に基づき、フルサービスリゾルバからは、1 ホップでコンテンツを保持するサーバに問い合わせる仕組みで動作する。

#### 5.4.1 RTT(Round Trip Time)

本項では、SORES が識別子から一意にレコード情報にアクセス可能である点について、DNS との比較評価を行う。SORES の名前解決では、従来の DNS では、ラベルごとにゾーンが移譲されている場合、レコード情報を保持するノードまでのホップ数はラベル数  $n$  に比例する。それに対して、SORES では、識別子から一意にレコード情報を保持するマネージャノードを特定できるので、常にホップ数は 2 である。このため、既存の名前解決システムより速度の向上が期待される。

#### 5.4.2 パケットサイズ

SORES では、224bit を固定長とするコンテンツ ID をシンボルとすることによって、レコード情報にアクセスする。この仕組みの影響で、SORES のパケット



は従来のパケットと比較して肥大する特性がある。このため、送信元を目的ホストと偽装することで目的ホストの計算リソースを圧迫する DDoS 攻撃に対して、脅威を高める可能性が予想される。

#### 5.4.3 トラフィック量

本項では、提案手法におけるトラフィックについて評価する。評価において、SORES では、シンボル志向の名前解決メソッドによって、既存の再帰問い合わせによるメソッドよりも少ないトラフィックに抑えることが期待される。SORES では、クエリ数とトラフィック量は比例関係にある。他方で、新たにマネージャ間通信という従来にはないトラフィックが発生する。本項では、これトラフィックがネットワーク全体にどの程度影響を及ぼすのかについて評価する。

## 6. 議論

### 6.1 クエリにおけるハッシュ値計算の最適ノード

### 6.2 今後の課題

## 7. 結論

## 謝辞

ご指導ご鞭撻賜りありがとうございました.

## 参考文献

- [1] P.V. Mockapetris. “Domain names - concepts and facilities. RFC 1034 (INTERNET STANDARD),” November 1987. Updated by RFCs 1101, 1183, 1348, 1876, 1982, 2065, 2181, 2308, 2535, 4033, 4034, 4035, 4343, 4035, 4592, 5936.
- [2] P.V. Mockapetris. “Domain names - implementation and specification. RFC 1035 (INTERNET STANDARD),” November 1987. Updated by RFCs 1101, 1183, 1348, 1876, 1982, 1995, 1996, 2065, 2136, 2181, 2137, 2308, 2535, 2673, 2845, 3425, 3658, 4033, 4034, 4035, 4343, 5936, 5966, 6604.”
- [3] R. Arends, R. Austein, M. Larson, D. Massey, S. Rose. “DNS Security Introduction and Requirements, ” March 2005. Updated by RFCs 6014, 6840.
- [4] S. Josefsson. “The Base16, Base32, and Base64 Data Encodings, ” October 2006. Updated by RFC 3548.
- [5] ICANN, “What Is an Internet Covert Channel?,” August 2016. <https://www.icann.org/news/blog/what-is-an-internet-covert-channel>. (accessed 2019-12-12).
- [6] S. Bortzmeyer. “DNS Privacy Considerations RFC 7626 (INTERNET STANDARD), ” August 2015.
- [7] KrebsOnSecurity. “Deconstructing the 2014 Sally Beauty Breach,” May 2015. <https://krebsonsecurity.com/2015/05/deconstructing-the-2014-sally-beauty-breach/>. (accessd 2019-11-30).
- [8] IronNet. “Chirp of the PoisonFrog,” February 2019. <https://ironnet.com/blog/chirp-of-the-poisonfrog/>. (accessd 2019-11-30).
- [9] Nick Hoffman. “BernhardPOS,” July 2015. <https://securitykitten.github.io/2015/07/14/bernhardpos.html>. (accessd 2019-11-30).
- [10] Fireeye. “MULTIGRAIN – Point of Sale Attackers Make an Unhealthy Addition to the Pantry,” April 2016. [https://www.fireeye.com/blog/threat-research/2016/04/multigrain\\_pointo.html](https://www.fireeye.com/blog/threat-research/2016/04/multigrain_pointo.html). (accessd 2019-11-30).
- [11] Palo alto Networks. “New Wekby Attacks Use DNS Requests As Command and Control Mechanism,” May 2016. <https://unit42.paloaltonetworks.com/unit42-new-wekby-attacks-use-dns-requests-as-command-and-control-mechanism/>. (accessd 2019-11-30).

- [12] Kaspersky. “Use of DNS Tunneling for C&C Communications,” April 2017. <https://securelist.com/use-of-dns-tunneling-for-cc-communications/78203/>. (accessed 2019-11-30).
- [13] CISCO Talos. “Spoofed SEC Emails Distribute Evolved DNSMessenger,” October 2017. <https://blog.talosintelligence.com/2017/10/dnsmessenger-sec-campaign.html>. (accessed 2019-11-30).
- [14] Cylance. “Threat Spotlight: Inside UDPOs Malware,” February 27 2018. [https://threatvector.cylance.com/en\\_us/home/threat-spotlight-inside-udpos-malware.html](https://threatvector.cylance.com/en_us/home/threat-spotlight-inside-udpos-malware.html). (accessed 2019-11-30).
- [15] K. Born and D. Gustafson, “NgViz: detecting DNS tunnels through n-gram visualization and quantitative analysis,” Proceedings of the Sixth Annual Workshop on Cyber Security and Information Intelligence Research, Oak Ridge, Tennessee, 2010, pp. 1-4.
- [16] Cheng Qi, Xiaojun Chen, Cui Xu, Jinqiao Shi, Peipeng Liu, “A Bigram based Real Time DNS Tunnel Detection Approach,” Procedia Computer Science, Volume 17, 2013, Pages 852-860.
- [17] J. Liu, S. Li, Y. Zhang, J. Xiao, P. Chang and C. Peng, “Detecting DNS Tunnel through Binary-Classification Based on Behavior Features,” 2017 IEEE Trustcom/BigDataSE/ICCESS, Sydney, NSW, 2017, pp. 339-346.
- [18] Asaf Nadler, Avi Aminov, Asaf Shabtai, “Detection of malicious and low throughput data exfiltration over the DNS protocol,” Computers & Security, Volume 80, 2019, Pages 36-53.
- [19] J. Steadman and S. Scott-Hayward, “DNSxD: Detecting Data Exfiltration Over DNS,” 2018 IEEE Conference on Network Function Virtualization and Software Defined Networks (NFV-SDN), Verona, Italy, 2018, pp. 1-6.
- [20] J. Ahmed, H. H. Gharakheili, Q. Raza, C. Russell and V. Sivaraman, “Monitoring Enterprise DNS Queries for Detecting Data Exfiltration from Internal Hosts,” in IEEE Transactions on Network and Service Management.
- [21] “OzymanDNS - Tunneling SSH over DNS,” <https://room362.com/post/2009/2009310ozymandns-tunneling-ssh-over-dns.html/>, (accessed 2019-11-20).

- [22] “iodine,” <http://code.kryo.se/iodine/>, (accessd 2019-11-20).
- [23] “DNSScat2,” <https://github.com/iagox86/dnscat2>, (accessed 2019-11-20).

## 付録

### A. 発表リスト (国内研究会)

1. 高須賀 昌烈, 妙中 雄三, 門林 雄基, “非実在ドメインに対するネガティブキャッシュの拡張と再帰問い合わせハッシュ化の提案”, 電子情報通信学会情報ネットワーク研究会, 2019-10-ICTSSL-IN, 2019 年 10 月.